



時空を超える

Above the Space-time

武田 信生

Nobuo Takeda

EICA 名誉会員・京都大学名誉教授

人には逃れられない制約がある。それは時間と空間である。時間の観念がなければ時間は存在しないのか？ 猫に時間はあるのか？ 犬にはどうなのか？

東海道新幹線が開業したのは1964年のことである。この時停車駅の違いによって、列車には「こだま号」と「ひかり号」の2つの愛称が与えられた。「こだま」は在来の特急列車に使われていた愛称であったが、「ひかり」は初めて使われる愛称であったと思う。こだまは音であるので、その速さは標準大気中で約340 m/s、一方、真空中の光の速さは約30万 km/sといわれている。各駅に停車する、いわゆる鈍行と、東京を出ると新大阪までの間、名古屋と京都にしか停車しない特急の速さの違いを、誰もが知っている伝播速度の違いで表現したのである。流石と感心させられた。

その後、同じ愛称であるひかり号でも停車駅がまちまちであったりと、多様化するニーズに合わせるために相当複雑なダイヤが組まれるようになった。そんな中、シンプルかつビジネスニーズに合った停車パターンが必要になったのであろうか、ひかり号をも追い越すダイヤが編成されることとなり、新しい愛称が求められた。その愛称が何になるかは大へん興味を引くことであった。なぜなら、光は地上で最も速いものと、小学生の頃から教わってきたことであつたのだから。光より速い、どんなものをもって来るのだろうか？

「のぞみ号」だった。“もの”の名ではなかった。“こと”の名をもって来たのだ。流石。のぞみ（希望）の速度は無限大なのだ。

速度は距離を時間で割った（除した）もの。つまり、（空間）÷（時間）なのである。人が逃れられない二つのものを一つの式の中に含んだ、大へんな“やから”なのである。道理で、「速度」には人を有頂天にさせるちからがある。あくなき速度の追求は、オリンピックゲームにも見られるし、交通手段の開発にも見られる。そんなにおおそれたものでなくても、日々の自動車交通のなかでの競り合いでも経験ができる。

「五劫思唯」とは“五劫”の長きに亘って思唯することをいう。法蔵菩薩が阿弥陀仏になられる前にされたのが“五劫思唯”であったといわれている。“劫”とは

何か？ 四十里四方の大岩の上に、百年に一度天女が舞い降りてくる。その天女の羽衣に触れられることによってこの大岩が擦り減らされて消滅するのに要する時間がすなわち“一劫”であるという（ほかの喩えもあり）。その劫が五つ。現代人ならば、あっさりと“無限大”とってしまうようなところを、それでも有限なものを使って表現しようとするのである。それは思唯するという“行為”があるために“無限”ということにならないのかも知れない。

阿弥陀仏の浄土であるといわれる極楽浄土（安養土）へはどれくらいの距離があるのだろうか？ 『仏説無量寿経』には阿弥陀仏は「此を去ること十萬億の刹なり」とある。“刹”とは世界のこと。したがって、十萬億の世界を超えた向こうにあるというのである。ところが、『仏説観無量寿経』には「阿弥陀仏、此を去りたもうこと遠からず。」と、すぐ“となり”にいらっしやる、というくらいの距離感なのである。これは一体どういうことなのであろうか？ どちらが本当のことを伝えているのか？

「即」という言葉にヒントがあるように思う。「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり（『一念多念文意』）。「瞬間」というよりは「同時」のことを「即」という言葉で表現してきたのであると思う。物事が分かるときというのは、ジワーと分かってくるのではなくて、「即」という感じで分かるのだ。まさに「瞬時」というより「同時」なのだ。

阿弥陀仏は、そのことが分かれば「即」なので、すぐそこにいらっしやるのだ。分からなければ、それは十萬億の世界を超えて行かなければ会うことはかなわないのである。この（仏教の）世界では無限大をゼロで割ったり、無限大にゼロを掛けたりすることなど平気なのだ。

無限大の空間を横切るにも、無限大の速度をもってすれば瞬時、というより同時なのだ。こうして時間や空間の制約を超えることができるのだ。

ということは、人を制約している空間や時間は、それを観念することから生じている制約なのか。猫や犬は、彼ら、彼女らが空間や時間を観念していないとすれば、時空に制約されずに生きているのだネ。